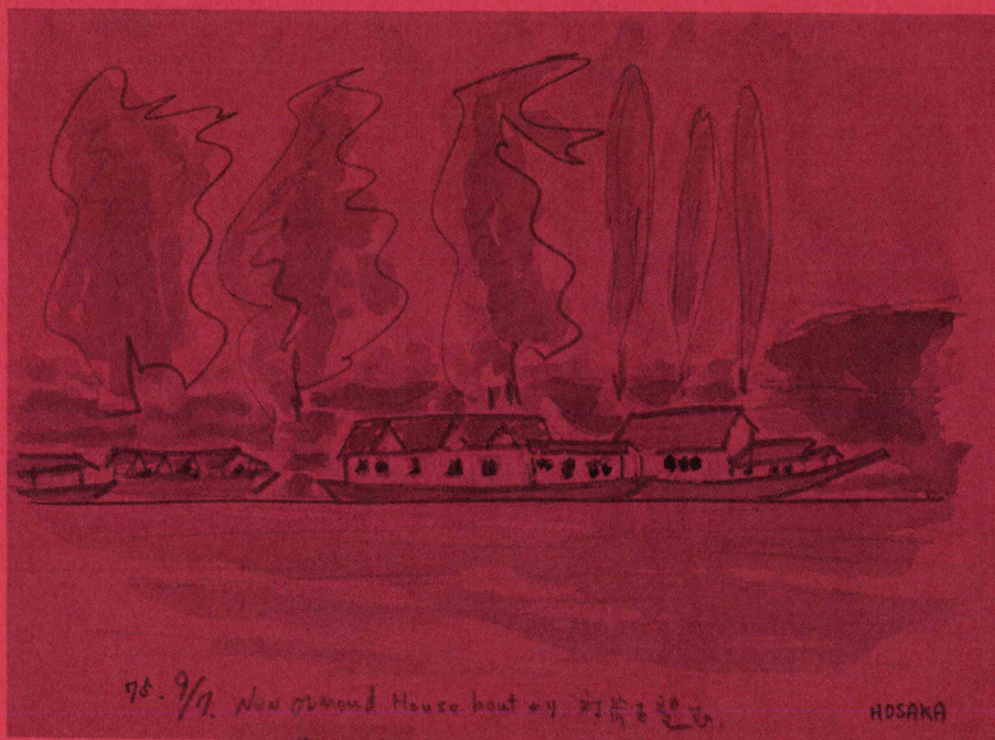


昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）昭和51年9月1日発行 通巻58号

ヒマラヤ

HIMALAYA

1976年9月号



日本ヒマラヤ協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

|||||.....|||.....|..-.....|.....|.....|

- ・ カンジロバ隊公式報告書 14
- ・ 日本からヒマラヤから 14
- ・ HAJ名古屋集会報告 14
- ・ ヒマラヤ山荘 オープンノ 15
- ・ アフガニスタン登山隊一現地だより 15
- ・ 帰国挨拶 17
- ・ HAJ会員による出版物 17
- ・ 新刊・旧刊 18
- ・ アッサム・シッキム調査隊について 19
- ・ ヒマラヤをあなたの目と足で確めて
下さい。 20

《HAJを考える——その2》

組織とメンバーのあり方

『ヒマラヤ』42号(50. 5)に“HAJとは何か——現状と将来”と題し、HAJのかかえている問題を分析し、HAJの到達すべき未来像を適格に描きだしていました。

その未来像は完べきであり、私達がつねひごろかくありたいと考えていたそのものであります。うっかりすると、HAJの組織は、そこに述べられていた形に、すぐにでもなれるのだと錯角を起すほどでした。

でも、現実はどうでしょうか。いまのHAJの体制で、そこに述べられている事を実現するためにはどれほど多くの人材と労力を要するかを考えたとき、気の遠くなるような感じさえいたしました。とても私ごとき者の手におえるものではない。誰れか、素晴らしい能力の有る人がやってくれるだろう——正直いって、そう思いました。

しかし、よく考えてみれば、それでは何も実現しないことは理の当然です。とすれば、何をすればよいのか、あまりにも完べきな未来像の前で、何から手をつけたらよいのか、とまどってしまいました。そこで私は、「組織」と「個」の関係から、HAJの組織をもう一度考えて見ました。

HAJは<ヒマラヤ>と言う共通目標を持ったインフォーマルな組織として大きくなってきました。

たしかに、会員は<ヒマラヤ>を目標にしていますが、その内容(目的)は各人各様です。また、会員がHAJを理解する時、それは、その人の経験環境、思想等の過去の認識を通し、その人独自の事実認識となって理解されているのです。HAJが、その活動に参加することが、会員ひとり、ひとりの心の中で、どのような位置づけにあるかは、目標が同じであっても、その比重に相当大きな開きがあると思います。これは、個の集合は必ずしも、それに比例した全体の和とはならないと言うことです。

このような、各人各様に開きのある組織を適確に運営するためには、個としての会員の意向を常に正しく認識しておくことが必要です。そして、正しい認識は、常に実現されたもの(現状)を出発点(企画)に絶えずフィードバックすることによってのみ生

み出されるものだと考えます。

今のHAJにとって一番大切なのは、この会員の意向(要望)がどのようなものであるか、それを正しく認識することではないかと思います。このことは、すでに「HAJとは何か」の現状の中で、『会員の志向と声を正しくとらえ、集約する機構がない。この点は重視する必要がある』とはっきり述べられております。

会員の意向を正しくとらえると同時に、会の意向もまた正しく伝えなければなりません。ここに、コミュニケーションの場の必要性が生じてきます。

話し合いの場に、出来る限り多くの会員が参加することは、会の発展にとって欠かすことのできないものです。しかし、それにはそれなりの方法をとらなければ、一部の人々の参加に終わってしまったり、単に“話し合いの形式をとればよい”といった形式上の集合となります。中味の伴わない見せかけだけの集りは、ときとして反撓を招き、その中で活動意欲を減殺してしまうことさえあります。いまのHAJの中にこのような事がないとは言いきれません。

これを是正し、コミュニケーションに内存する事実と推論の混同の障害を排除するために、柔軟なコミュニケーションの場を持てる組織であると共に、組織内部の結びつきの方向を変える必要があります。

HAJの会員は、いまそれぞれの方が、地区、クラブ、そして研究会において個々に活動しています。しかしながら、この発生と活動は、日本社会の特色とも言うべき“タテ”の原理による人間関係によって結ばれております。

私は、これらのグループを、活動内容や役割は異なっているとしても、HAJの組織の中においては、同等のウェイトを持って存在し、お互のグループ間の協調が必要であるとする、二項対立の論理を持って連結運営することが、HAJをしてよりよい方向へと移行させる大切な過程であり、早急に成立させるべきだと考えております。

(山倉 洋一、HAJ理事

Expedition, 東北担当)

《H & S Plan のページ》

サセル・カリン＝ラダックの名峰

H A J ・ラダック研究会

インドの北辺 カシミール州のラダック地方にあるこの山は、カラコルムの東端でもあり、現在では外国人の入山は困難であるが、この山とその周辺は気候風土、民俗などいろんな点から非常に興味深い地域である。以下は将来H A JよりH & S Planの一環としてこの地へむかう隊を送るための事前研究の一端を抄録したものである。

＜サセル・カンリ山群＞

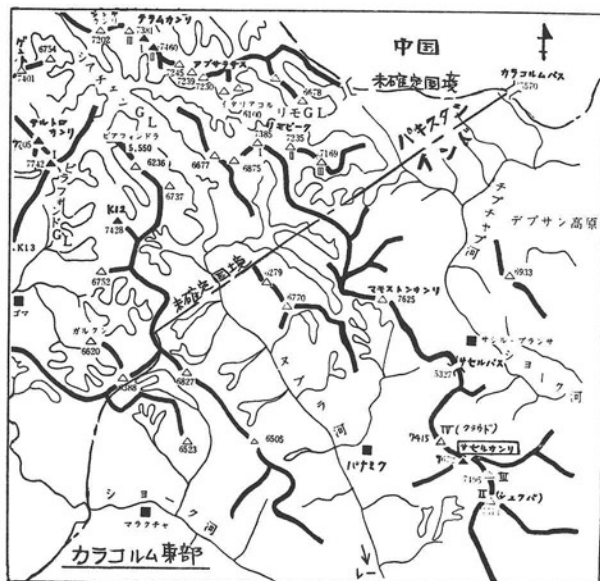
Rimo氷河から流れ出た、Shyok 川がぐるっと囲んだところにあり、主峰は7672mで1973年にジョギンダー・シンの率いるインドITBP隊によって6月6日に初登頂されたが、Ⅲ峰7513m(シュクパ・クンチャン)Ⅳ峰7495m、Ⅴ峰7415m(クラウド・ピーク)は未踏峰に残っている。

そして、その北にはマモスト・カンリ7625mもある。

＜アプローチ＞ スリナガールまで日本から空路2日、そこから車で2日でラダックの主都レーに着く。レーからカルドウン・ラ(5570m)を越えて西面のパナミクへ入るか、初登頂のときの東面へチャン・ラ(5289m)を越えて接近するかである。ショーク河の条件がよければ5日ほどでB・Cへ入れる。この地域の天候は5～10月位まで比較的安定している。

＜登山史と主要文献＞ (概説は「ヒマラヤの高峰I」深田久弥 白水社 1973, P240～251にある。)

- ①(1889) ヤングバスバードのカラコルム峠越。
- ②(1897) Neve がパナミクからサセルヤンリ偵察。
- ③(1906) 日野強, ④(1908) 橋, 野村カラコルム峠越。
- ⑤(1907) Neve マモスタンカンリ調査, Thirty Years in Kashmir 1913。
- ⑥(1909) ロングスタッフ, プクポチエ谷へ。
- ⑦(1922) ⑧(1929) フィサー (オランダ) プクポチエ氷河で側量。 ⑨(1946) ロバーツⅣ峰に試登, H.J.VOL. XIV. XIV 1947。
- ⑩(1951) ビトッツ Stock Kangriに登頂。
- ⑪(1956) ジャヤール大佐(印) サカン・カンリ



(6943m)に登頂, H.J.VOL. XXV 1964。

⑫(1969) ノギャル(印) サセルカンリ偵察。

⑬(1970) IMF隊 プクポチエ氷河より6140m峰, 他3峰に初登頂, H.J.VOL. XXX 1970, A.A.J 1971。 ⑭(1973) ITBP隊サセル・カンリ初登頂, 帰路この山群を1周, A. A. J 1975, H. M. J 1974, 岩と雪40号。

＜H & S Plan 事務局＝

H A J 東京事務所案内＞



＝耳で感じるヒマラヤ＝

わが国で聴取できるヒマラヤ諸国の放送

BCL (Broadcasting Listener, 放送聴取者) がブーム的な昨今です。高性能の受信機が安価に手軽に入手出来ることもあって、小中学生にまで人気があるようです。ともあれ、国内に居ながらにしてインド音楽に接したり、ホットニュースも聴けるので、我々ヒマラヤに関心を持つ者も積極的に利用したいものです。

◇ 受信機について

小さな出力で遠くまで飛ぶという特性から、外国からの放送は殆んどが短波で送られています。短波を受信できるラジオであれば聴取できるわけですが、良好な受信のためにはなるべく性能の良いものが欲しいのは言うまでもありません。一応次のような目安で選びます。

① 短波帯をできるだけ広範囲にカバー可能なもの。

3.9MHz から27MHz の中に殆んどの日本向け放送が入っていますので、この領域をカバーできるもの。

② 選局が容易であること。

スプレッドダイヤルや、微妙な選局操作のできるファインチューニング機構を備えているのが便利です。また、直読デジタル装置があれば極めて便利です。

◇ 各国の放送

国 名	放 送 局 名	所 在 地	放 送 時 間	周 波 数	言 語	受信状態
アフガニスタン	Radio Afghanistan	Kabul	2300-2330	4775 kHz	英 語	良
イ ラ ク	Radio Baghdad	Baghdad	0430-0500	9745 (1125-0830は6095kHzでアラビア語)	#	
イ ラ ン	Voice of Iran	Tehran	0500-0530	9022 (0530-0630はペルシャ語)	#	良
イ ン ド	All India Radio	New Delhi	0745-1010	15280 (1980-2000は15190kHz) 他	#	#
パキスタン	Radio Pakistan	Rawal Pindi	1130-1145	17830-21730	#	#
スリランカ	Srilanka Broad Casting Corporation	Colombo	1930-2030	15120-9550	日本語(月、金)	#
バングラデシュ	Radio Bangladesh	Dacca	0315-0415 1345-1415 2130-2200	7250-9495 17745-21685 17690	英 語 # #	# # #
ネ パ ー ル	Radio Nepal	Kathmandu	2350	3425-7100-7105	#	
ブ ー タ ン	Radio National Youth Association of Bhutan	Thimphu	0930-1230 2100-0030	7040 #	ネパール語 ヒンディ語	
ビ ル マ	Burma Broad Casting Service	Rangoon	2330-0100 1830-2330	5040	英 語 ビルマ語	良
中 国	Radio Peking チベット・内蒙古・新疆・雲南・四川・青海等の人民放送がある。	Peking ※チベット人民放送 Rhassa	0630-0655 1830-2330 夜 間	冬 1040-4960-6955-7480 夏 6955の代りに9965 4110 他	日 本 語 中 国 語	極良
ソ 連	Radio Moscow	Moscow	1700-2300	5960-11690他多数の周波数で送られている。	日 本 語	極良

すが、これを備えたものは大変高価です。しかし、直読デジタルでなくとも5kHzあたりまで細かく読めるのであれば充分です。マーカを備えていて基準周波数でマーカ信号を発射する機構になっていれば、スプレッドダイヤルと組合わせて非常に効果的です。

メーカーからは1万円～100万円まで各種市販されていますので、フットコと性能をにらみ合わせて選択することになります。

◇ アンテナなど

アンテナ端子の付いているラジオであることが条件です。通常ロッド、アンテナでも多くの放送を聴けますが、より感度を良く、安定した状態で、また小出力局や遠隔局をとらえるとなれば外部アンテナが欲しくなります。マニア的に熱中するのでなければ一般的には無指向性の市販の品で充分と私は考えて使ってます。深入りすれば、ヒマラヤと同じキリがありません。

また、海外からの放送は24時間フル送信しているわけではないので特定時間帯にワッチしなければなりません。したがって「タイマー」があれば事前に選局セットしておけるので便利です。(稲田定重)

初の“インド・ヒマラヤ研究会議”

第6回東日本ヒマラヤ研究会＝100名が参加

6月26日～27日 宇都宮で開催

H A Jのメイン研究会となった東日本ヒマラヤ研究会は、会場を初めて東北以外の地に移して開かれた。地理的好条件に加えて、最近にわかに注目されつつあるインド・ヒマラヤをテーマとしたこともあって、参加者の範囲は北海道から九州にまで及び、100名、全国的性格を帯びた研究会となった。本研究会の詳しい内容は本年11月頃までに報告書として刊行される予定なので、ここにはダイジェスト的にあらましを報告したい。

第1日(6月26日)

前日からの宿泊者20余名があり、当日も早い人は午前3時頃から到着し始め、7時の受付開始を待っていた。

9時30分開会、山倉理事が会長からのメッセージを代読、栃木県岳連理事長から歓迎の言葉をいただいた。

◇ 9.45-10.25 最近のインド・ヒマラヤにおける記録 稲田定重(H A J 理事)

75～76年の各国隊の記録、73年以後の記録の補充、今後の計画の動きについて発表。インド・ヒマラヤは地域的に広く、また資料も少ないこともあって完全な記録をまとめることは非常に難しい面があるという。

◇ 10.25-11.00 <地域研究>東部ヒマラヤへの誘い

藤井毅(H A J 理事、東部ヒマラヤ研) シッキム、アッサム、アルナチャル・プラディッシュ地域に関する発表。探検・踏査史のあらまし、地域の人文について大変興味深い内容であった。特にアルナチャル地域はまだ未明の地域で今後共バイオニア・ワークの領域であるといわれる。

◇ 11.00-11.30 シッキム・ヒマラヤのこと

稲田定重(H A J) 外国人にはクローズされているこの地域には、6000m級の未踏峰が数多く存在しており、オープンが待たれるとのこと。また、カンチェンジュンガに関してのルート研究が発表され、いずれはH A J

隊の目標として非常に興味深いものがある。

◇ 11.30-12.00 <インド・ヒマラヤ登山隊報告>75年日印合同カシミール・ヒマラヤ登山隊 山森欣一(副隊長、H A J 理事)

ヌン(7135m)登山の状況がスライドによって紹介された。

昼食時、休憩時間を利用して各種ヒマラヤ資料の頒布が行われた。30余種の資料が並べられ、係はテンテコマイであったようだ。

◇ 13.00-14.00 <記念講演>ナンダ・コットの想い出

竹節作太氏(1936年立教大学ナンダ・コット隊) 40年前、日本から始めてヒマラヤの高峰に挑んだ模様を高令にもかかわらず、昨日のここのように鮮やかに再現していただいた。当時のおカネで3万円を調達する苦心談、大町の対山館の女中さんが3000円も寄附してくれ感激したこと、月給を前借りし新婚の奥さんを実家に帰して出発したことなど、日本を出る苦勞はいつれの時代も大変であったようだ。キャラバン中の話題も豊富で会場はしばしば爆笑につつまれた。登山にかかってからは現在とは比較にならぬ装備にもかかわらずレベルの高い登攀が行われたことは参加者一同に深い感銘を与えた。なお、氏が頂上までかつぎ上げたアイモによって撮られた16ミリ映画が上映された。戦災で焼失し、我国には只一本しか現存しないという貴重なフィルムであった。フィルムが古いため何度か中断したが、事務局の必死の努力で翌日昼食時に全巻上映出来、独得のナレーションで当時の朝野を挙げての遠征の模様を実感出来たのは幸いであった。なお、氏は現在白馬観光開発KKの重役として元気で活躍されている。

◇ 14.20-19.00 <インド・ヒマラヤ登山隊報告> 下記の隊から各30分間の発表が行われた。

① 75年H A J ザスカール踏査隊

池田昭二(H A J、酒田)

8ミリ映画、見事な高山植物の群落が印象的で、トレッキングの楽しさを実感。

② 75年札幌山岳会キシュトワール・ヒマ
ヤ登山隊 千葉良正 (H A J)

ブランマⅡ (6425 m) 初登頂の様子が素晴らしい出来栄の8ミリ映画で紹介された。5つの前進キャンプを進めての困難な登山であった。

③ 伊勢崎山岳会ヒマチャル・プラティシュ・
ヒマラヤ登山隊 田島忠夫 (同隊装備担当)

ティロット谷源頭の P.K. 6109 m 登頂について
の報告があった。4名の軽遠征隊であった。

④ 淀屋橋労山第一次ヒマラヤ遠征隊

竹沢一誠 (食糧担当)

アリ・ラトニ・ティバ (5470 m) 登頂、総勢15
名の大世帯ではあったが面白い遠征であったようだ。
大阪弁での軽妙な報告。

⑤ 長野県労山インド・ヒマラヤ登山隊

森田稲吉郎 (隊長)

74年のビハリジョット (6290 m) の記録。チャ
ンパ地区にあるこの山はかなり困難な登攀であった。
インド・ヒマラヤ通の森田氏によってスライドで報
告された。

⑥ 75年H A J ガルワール・ヒマラヤ遠征隊

稲田定重 (副隊長)

リシ・パハール (6922 m), サーフ・ミナ
ール (6911 m), バムチュー (6303 m) の3つの
初登がスライドで報告された。

⑦ 75年上市峰窓会ガルワール・ヒマラヤ遠征隊

田辺郁夫 (隊長, H A J)

カランカ (6931 m) の初登頂記録の発表、壮絶
なシプトン・コル越えの状況、カランカ南西フェ
ースの登攀も、田辺氏の話術にかかると楽しい登山に
変ってしまう。8ミリ映画で終始会場を爆笑のうず
にまきこみながらの発表技術にはホトホト感心させ
られた。

⑧ 75年岩手県山協ガルワール・ヒマラヤ登山隊

工藤洋司 (副隊長)

デビスタンⅠ (6678 m) を登頂したが、キャ
パブルートに残雪多く、ベースキャンプまで20日間
もかかるという大変な登山となった。登山そのもの
よりもアプローチが困難であったという。H A J 隊
のシーズンと比較して見て興味深かった。発表技術
? が上手で長時間の連続報告のあとにもかかわらず
参加者をひきつけていた。

⑨ H A J シッキム・アッサム調査隊

藤井毅 (H A J 理事)

午前中の地域研究に引づく形で、スライドによ
るこの地域、主としてアッサムの紹介が行われた。
インド・ビルマ国境の模様、遠くかすむアルナチャ
ルの山などは参加者のあこがれて止まぬ所であった
ようだ。また、沢山の少数民族が紹介され興味深い
ものがあつた。

朝から長時間のスケジュールから解放された参加
者は、夜のディナーパーティで思いきりくつ
ろいだ。19時20分、西郡光昭氏の司会で開会、大崎
理事 (北海道) が主催者側を代表して挨拶。日本勤
労者山岳連盟海外登山担当の森田千里氏からの挨拶
があり、おわりに最年長ということで高橋照氏 (H
A J) の音頭で乾杯し懇談にうつった。ビール・酒
は充分にあつたようで、20時30分の閉会が惜しまれ
た。

21時から情報交換会が行われた。

ネパール部会 (高橋照氏担当)、ガルワール部会
(清水澄、沖 担当)、カシミール・ラダック部会
(山森、池田担当)、インド一般 (稲田、西郡担当)
東部ヒマラヤ部会 (藤井、菊地担当) が設けられた。
研究会の席では出せぬ面白い話、ウラの話も豊富に
飛び出し成果があつたようである。事務局からは飲
み物の差入れがあつた。以後は自由交流ということ
で、翌朝4時頃まで活発な話し合いを続けた部屋も
あつたようである。

第2日 (6月27日)

前日の奮斗でいささか渋い目を揃えて開会。

・ 8.30—9.00 <地域研究> サセル・カンリ

沖 允人 (H A J 常務理事)

ラダックの名峰サセル・カンリ (7672) は外国
人にオープンされていないが、遠征の目標としては
大変興味のあるところ、踏査、登山史、文献等につ
いて充実した発表が行われた。

・ 9.15—12.10 <総合パネル討議> インド・ヒ
マラヤ登山をめぐって

11名のパネラーによって、インド・ヒマラヤ登山
にからむ総合的な問題が話された。パネラーはもち
ろん、会場からの発言も多く、うまくかみ合せて成
果をあげた。司会は西郡、稲田が担当した。詳細は
本報告書にゆずることにしたい。2日間にわたる会
議は事務局の3カ月以上に及ぶよう大なる努力の上
にスムーズに進行した。事務局を担当した小島守夫、
館野秀夫の両氏には心から御礼を申しあげたい。

(稲田定重)

ラダック — 2

S.G.コウル

「Beautiful Valleys of Kashmir and Ladakh」

by Samsar Chand Koul, 1963

(P.132 ~ P.142) より

ザスカルは 冷たく、すさんだ親しみのわかない土地である。はだか麦と豆以外は何もそだたない。そして、非常に単純な素朴な人が住んでいる。彼らの財産是一群の馬であり、Padam をのぞいては人口の約40%が回教徒であり、その他はほとんど仏教徒である。2つのピーク、ヌン、クンはDome Peak (23476 フィート, 7135 m) と Pinnacle Peak (23300 フィート, 7077 m) であり、その存在によって他の高いピークが小さく見える。Panikhar から約24km の Parkhachik の反対側、他の山々の上にそそり立っているのが見える。

インダス谷はこの地区のほぼ80%以上を包括している。北西の端には、もちろん停戦ラインの内側だが、仏教徒ダード (Dard type) に属した人たちで、数百年前にギルギットから移住してきたといわれている Dokpas 人の土地がある。彼らのアーリアン系の顔つきはモンゴロイド・バルティス (Baltis) の仏教徒から見ると著しくことなっている。

谷をさかのぼって行くとモンゴロイド・ボオドス (Bodhs) が優勢に住んでいるようになる。レーはこの地区の行政の中心の町であるが人々はたいはい回教徒である。Shia と Suni 派の両方ともかなり住んでいるが、カルギル群における同じ宗教を信じる人の厳格な正説に対しては、はっきりしたコントラストを示している。周辺の状況によってそれらの人の比較的自由に信仰している谷の東の端には Changthang の広大な平原があり、そこには他のいくつかのルートでも行ける遊牧民の家のある Champas がある。すなわち Changla 峠 (18000 フィート, 5485 m) によってはさまれた Changla ルート、Tanglang 峠 (17500 フィート, 5333m) のある Tanglang ルート、インダス川にそっている Rong ルートである。Tanglang la のむこうは2つに分けれるルートで1つは Lachulong 峠 (16600 フィート, 5059 m) を横切ってパンジャブの南にむかい、他は東にむかい硫黄鉱山と温泉のある Puga を含んだ Rupshu 地区をとおり、

Polokonka (16300 フィート, 4967 m) を越えて大きな塩湖、Tsomoriri に出る。

この湖は長さ24km、巾5~8km、4541m の高さのところにある。

Karzok Rupshu の Head Quarter (行政中心地) カルゾックは湖のすぐそばにある。Rupshu 地区は4260~4571m の標高にあり、だから大変寒いが空気が乾燥しているので、晴天の日の太陽は焦げるほど熱い。空気はかなり希薄で旅行者は普通そんな高いところに住んでいないので、呼吸困難を感じる。レーと Puga の距離はほぼ160kmあり、もう96kmをたどると Hanley に着く。そこはチベット国境の Demjoke から70km のところにある。

戦略上で重要な村、Chhushok は有名な塩湖でサファイヤ色の水が見られる。Panghong 湖を経由して Changla ルートによって行ける。Panghong 湖は約144km の長さに渡って点々とある湖で1部はチベットにあり1部はラダックになっている。中心の湖は長さ64kmである。巾は3.2~6.4 kmと変化する。湖はほぼ標高4266m の高処にある。

ヌブラ谷 (Nubra Valley)

レーからこの谷へは2つの入口がある。Khardong La (17500 フィート, 5333m) と Digar La (18000 フィート, 5485m) である。Khardong La ルートは Digar La ルートにくらべ短いが、より危険である。以前からそこには人を犠牲にしてしまう雪崩がおこるからである。Khardong La は一般的に安全とはいえず、6月の終りより早いときに越えると便利がよい。雪が山の斜面から消えないとき峠をこえるためにやとえるヤクが唯一の輸送動物となる。

43km の距離をレーから登りそして Khardong 谷へ下って行く。1度、峠を越えるきびしい試練をすぎればにこやかな可愛らしい谷が見えはじめ、リンゴやアプリコット、クワの木が育つに充分なあたたかさのところになる。谷はそこそこに濃い灌木のしげみが見えるようになる。Shyok は無限の水の

保存地Khumdang 湖の出口となり、その水を今はパキスタン領になっているスカルドウのKerisでインダス川の水に配分している大きなヌブラ川へ流入させている。

Tshtiの村はこの川を渡る吊橋があるので容易に対岸へ行ける。そこには沢山のにぎやかな村々があり、川の兩岸には大きな寺院がある。その1つがヌブラ川の左岸にあるPanamckである。ヤルカンド・ルートの人々住んでいる最終の村であり、そこには温泉もある。次の村Lehanglingは1軒か2軒の家しかない。ヌブラ谷はKhapluにつづき、今はパキスタンになっている。そして、1948年のパキスタンのラダック侵入のときはげい戦があった。

ダラス谷(Dras Vally)

Zoji Laから発するDras川によってこの谷は水が補給されている。この地区の行政中心地、Drasは谷が広く開けたところにあり、自慢している学校、施業所、郵便局と電報局がレスト・ハウスの近くにある。Drasへの夏の短期間の滞在は楽しい経験になるが、冬はその沢山の降雪はおそろしいほどである。なにしろアジアで人が住んでいるところで2番目に寒いといわれているところである。たき木は少なく、ゾジ・ラのカシミール側のふもとバルタル(Baltal)から運んでくる。

この地区はDard族の親戚のB rokpasが住んでいる。Shinnaの方言を話す。そして、バルチ(Balti)の人々とも、アーリアン系の顔とも違っている。ずーと昔にラダックのこの地にギルギットのチラス(Chilas)からきたという伝説がある。

鳥と動物

ラダックに見い出せる鳥類はハゲタカ、トンビ、マグツタカ、ワタリガラス、赤いくちばしのカラス(ベニバシガラス)、カササギ、やまのり一種バラ色のウソ、金色のウソ、大ウソなどがスル地区およびドライエリアに見られる。Rupshuにはチベットヤマウズラがよく見られる。また、ラダックにはヒマラヤ雪ドリ、トキがいる。

ラダックにいる野性の動物ではアイベックス、チベット・ガゼル(カモシカ的一种)、チベット・カモシカがいる。黒熊、雪ひょうもあるところでは見られる。おおかみはいたるところにいる。Skaing

または野性の馬がChang thangの広い草原で見られる。

芸術と文化

土地は全般的に貧しいが人々の芸術的天賦の才は高い。どのBodhでも芸術家が住んでいるようだし、魚が氷をおよぐように油絵や水彩画を描く。この土地生れの人によって絵がコンパの壁やキャンパスや紙に画かれた。信じがたいものである。彫刻家の芸術も、才能の高さを示している。Mulbekでは約6mのMaitreya Buddha(ブッダの到来、チベットではChambaという)が天然の岩に彫られている。そして、形と表情は左右対称になっており、見る人に賞賛せざるを得ないような表現力がある。レーの町には2階建の古いゴンパがあり、座っているChambaの像がある。体のことになった部分の姿勢と、左右の対称性と表情の美しさ、特に目の恍惚とした表現はいきそをむかしさで見入る人を魅了する。12kmほどレーからいったSheyには同じような巨大な姿勢の金属性の鑄造像があり、芸術家の驚くべき力を示している。像は金と銀で飾りつけられ、宝石がつけられている。

ゴンパは宗教的な学校、ラマの養成所というだけでなく、この乾燥した荒れた地域の住民が寄贈した崇高な証拠を示す芸術のギャラリーでもある。歌やおどりはあまり印象的なものはない。

崇高な精神の荘厳な媒体としてのおどりをおどることや修練はラダックを含むチベットとその周辺特有のものである。酒宴のときのおどりは欠かせないものであり、年令と性別をとわず、すべての人がその純潔な礼儀正しきで好みによって参加するのである。

その他の芸術、建築もラダックで発達をしていて、巨大な様式と大きなゴンパのどっしりした建て方は見のがすことのできないものである。どの村やお寺の出口と入口のところに立っている主壁には、80m位の長さ、数メートルの巾と高さをもち、上部は数千の平たい石がつんであり、Bhaddhaの像または、オンマニマドメフムの文句が刻みつけられている。仏教徒の信仰の深い祈りの永続的な記念碑である。

レーの町の偉大なゴンパSpi tuk(レーから6.4km) Hemi s(レーより35km)そしてRezong(レーより58km)ヌブラのSanstainlingなどは訪れる価値がある。

ヘミス・ゴンパの有名な6月の第1週におこなわれる年中行事であるダンスはヨーロッパやアメリカからも人が訪れて、紹介されている。他のゴンパのおどりは冬におこなわれるのでラダックの人以外にはよく知られていない。

文化の広がりや深さは心地よい丁寧さ、うたがう余地のない誠実さを具体的に表現するものであり、優雅な礼儀、社会的エチケットなど、ラダックを紳士の国にするすべてのものをもっている。

装 備

旅行者はどこへ行くにもよく準備するべきであるが、しかし、隔絶された地理的条件のラダックでは特にあらゆる危険にあうとして準備をすべきである。軽テント、かるくてあたたかいシュラフ、乾燥した食物、各種とりまぜた薬品、ガーゼ、ほうたい、

もし、旅行行程に氷河が入るならピッケル、ハーケン、ロープ、ゴーグル、テルモス、懐中電灯、キャンドル、マッチ、もし、馬で旅行しようとするなら、ポニーが提供する鞍はたいいてい具合がよくないので自分にあった鞍を持って行く方がよい。真夏でも衣類入れの中には防寒衣をつめておくことである。顔にぬるワセリンもって行く方がよい。太陽の息がつまるような熱に対処するために。カメラと望遠鏡をもって行くのも必要である。

旅行の時期がよく、また計画もよくできており、そして、旅行者がよく準備をしているなら望むものすべてこの地区の中で得られることであろう。冒険、スリル、めずらしい文化の中を歩く、そして野性的な広大な光景のいくつかを自然の中に見るであろう。

(沖 允 人 訳)

HAJ 出版物について

日本ヒマラヤ協会（以下HAJと略称）の名称を使用して出版する登山、遠征などの報告書、ガイドブック、研究報告書などすべての出版物は下記のいずれかの方法によるものとし企画した時点で理事会の承認を得ることとする。

A. <公式報告書>

登山・遠征・調査隊研究会の報告書（HAJが名義的、実質的を問わず主催したもの）

a, 出版責任者中心方式 例「カンジロバ隊速報」[Expedition I] 左記の隊など出版責任者が原稿執筆・企画・編集・校正・出版・販売など報告書に関する一切をまとめ、責任をもって出版する方式である。これに要した費用はすべて出版責任者が支払う。販売などによって生じた果実はすべて隊または出版責任者に属する。ただし、報告書のていさいなどではできるだけHAJのこれまでの出版物類にそろえることが望ましい。出版部数にHAJ関係の寄贈分として50部、保存用10部、計60部をHAJ寄贈分として含めること。また、HAJが希望すれば若干部を原価で購入できる。

b, HAJ中心方式 例「カンジロバ公式報告書」HAJ主催の隊または研究会などが中心となって素編集までおこない、あとは遠征隊関係者および、それ以外のHAJ理事会から委嘱された者による、編集委員会がすべてをおこなう。素編集の終わったものをHAJで整理や再編集をおこない、発行・販売に関することを決める。ここまでの費用は主催した隊または研究会が負担する。HAJは発行部数を決めたり、販売方法を考えたり、編集後の一切をおこな

う。隊関係者には隊用50部、隊員用10部×隊員数を無料で配布するが、隊は出版に伴う費用の半を負担する。追加購入は原価とする。（約40%引）

（会員には20%引程度とする）生じた果実はすべてHAJに属する。

例 出版に関する費用一切=A（100万円） 発行部数=B（1000部）、寄贈数=C（190部）
HAJ用C1=50 隊用C2=50 隊員用C3=10×9名、保存用C4=10

$A \div [B - (C1 + C2 + C3 + C4)] + \text{送料} + \text{雑費} = \text{一冊の原価とする。この例だと } 100 \text{ 万} \div (1000 - 190) = 1235 \text{ 円} + 65 = 1300 \text{ 円。}$

定価（50%増） $1300 \text{ 円} \times 1.5 = 1950 = 2000 \text{ 円}$
（約20%引（1600円）で売って625冊が採算点）

隊負担額 $100 \text{ 万円} \times 0.33 = 33 \text{ 万円}$

HAJ負担額 67 万円

B. <HAJの責任出版物> 例これまでのHAJ出版物のようにほとんど原稿から出版・販売まで一切をHAJでおこなう。費用はすべてHAJが支払うが果実はすべてHAJに入る。執筆者にはできた出版物の若干部を原稿料、編集料として若干部を進呈する。

C. <HAJの名をつけた個人的出版物>

HAJ後援の隊や個人的なものは保存用として10部、HAJ関係者への寄贈用として10部、計20部をHAJへ寄贈する。出版に伴う費用およびそれから生ずる果実はすべて出版者に属する。

1976. 1. 30

ラマ教の世界

岩 水 竜 峰

去る5月29日、ビスタリークラブ集會に先だち、H A J顧問である神谷貞義先生（元奈良医大教授・眼科）より、秘蔵のラマ教コレクションを特別に鑑賞させていただく機会を得、集會参加者約30名が、神秘の一時を過ごした。先生は、過去数回にわたってネパール眼科医療のために“アイキャンプ”なる事業を通じて、大変尽力され、その結果、ネパール国王などからの贈り物を含めて、数百点を所蔵され、まさに日本一のラマ教コレクションとして大変有名である。鑑賞に先だち、筆者が約1時間にわたって、ラマ教の一般の説明を行なった。以下の拙稿は、当日説明した原稿に一部加筆したものである。

「ラマ教とは」

ラマ教は、正式にチベット仏教と呼ばれる大乘仏教で、特別異なった宗教ではない。しかし、ラマ教と呼びだしたことに次のような理由がある。

Lamaをチベット人は、Bla-ma（上師：Bは黙字）と呼び、梵語Guru（師匠）の訳語である。ラマは元来高僧のみに与えた尊称であったが、いつのまにか一般僧もラマと呼ばれるに至った。しかも、その数はチベット全男子人口の $\frac{1}{5}$ を占める程多く社会の上層はラマのみで埋まっている感が強く、かつ彼らの地位は社会的に高く尊崇され、特に弟子においては、絶対神聖視され、仏教の根本である「仏・法・僧」の三宝に、真理の伝達者としての「ラマ」を加え四宝とした。つまり「ラマ」の地位は「法・僧」はもちろん、「仏」より優位にあるという。そして、ラマの教義上の意味と、活仏的存在が著しい特徴であるところから「ラマ教」と名称されるようになった。

「チベットへの仏教公伝」

インドの仏教がチベットに公伝されたのは「吐蕃」の最初の王ソントツェンガムポ王（在位622年－649年）の頃とされる。（日本の仏教公伝は538年）

仏教公伝以前のチベットには、数世紀にわたって

チベット在来の宗教として、土俗の固有信仰であるシャーマニズムが盛行していた。これがボン教である。しかし、当時チベットをとりまく諸国、とりわけ中国とネパールにはさん然と輝く仏教文化の花が咲いていた。（唐の時代であり、ネパールはリッチャヴィ王朝アムシュ・バルマンの時代）。したがって、徐々にではあるが、チベットに仏教信奉の気運が醸成されつつあったことも事実である。

「吐蕃王国」は、チベットにおける最初の古代専制王国であり、チベット全土を統一支配、首都をラサに定め、要塞化した堅固な王城を築いていた。しかし、文化的には未開であり無知文盲であった。したがって積極的に外国文化の移入に努めた。仏教公伝の直接的な原因として、中国からの文成公主の入嫁とネパールからのブルークティの入嫁さらにトンミ・サンボータらのインド留学があげられる。文成公主は、インド伝来の栴檀の釈迦像を持参し、ラサ北郊にラモチェ寺を建立、随行として僧侶・文化が来朝し、詩書や紙墨がもたらされた。ブルークティ妃は、仏像や経典を持参し、僧侶を伴り寺大さまで従え、ラサにトウルナン寺を建立した。このように640年頃、時を同じくして、ネパールと中国の両系統が吐蕃王朝に伝えられたとみて良い。外国文化の積極的移入とみうけられるが、一方では、中国やネパールの対チベット懐柔政策ともみられる。このような形でチベットに入った仏教は、王廷を中心とする貴族達の上流社会にのみ受容されていたと思われる、一般の民衆には、仏教よりも在来のシャーマニズムに親しかったことであろう。

「仏教の興隆」

8世紀に入って、チベットの国威は著しく伸張した。四隣を制圧して諸国を睥睨し、チベット全史を通じて最も強力な時代であった。インド・中国からも仏教・医学・天文に関する書籍も流入し、それらのチベット訳も完成した。しかし、それらに反するようにボン教徒の排仏運動も起り、一時期ボン教徒に支配される時代も続いた。そのうち、チソン王

(761年)の時代に至り、仏教が積極的に取り入れられ、再びその地位を不動のものとした。当時唐の都長安を占領し吐蕃王国の全盛期をもたらす一大契機となった。チソン王は、長安の占領や東西交通路の掌握など、国威の伸張と国力の増強を努めるとともに、仏教を正式に国教として採用した。

「タントラ仏教の導入」

国教化された仏教も容易に民衆の中へは浸透していかなかった。当時インドにおいて第一級の宗教学者とされた、シャーンタラクシタがチベットに迎えられたが、ボン教しか知らなかったチベット民衆に難解な大乘仏教哲学が容易に受け入れられないことを知った。そこで彼は、チベット人になじみ易いボン教のような魔術に傾斜した教えであると考えて、とりあえず一つの手段として、当時インドで流行していた、タントラ(密教)仏教の導入を王に勧め、偉大な魔術力を持つ高僧、パドマサンパワ(蓮華生)をチベットに迎えた。

チソン王の招きで、773年チベット入りしたパドマサンパワは、その威大な魔術によって人々から尊信を受け、チベット人にタントラ仏教をうえつけていった。いいかえれば、彼によって後世のチベット仏教が性格づけられた。シャーンタラクシタとパドマサンパワの二人は協力し、チソン王を始め、多くの高官達の援助のもとに、ラサの東南約100kmサエムの地に一大寺院を建立した。上層はインド式、中層は中国式、下層はチベット様式であり、775年に始まり787年に完成している。落慶法要には、インドのナーランダ僧院から、12名の僧侶を招き、チベット人6名に始めて授戒をおこなった。これは、チベット仏教の最初の僧団が成立し、組織されたきわめて重要な歴史的意義を持ち、のちサエム寺は、仏教文化の殿堂であり、源泉であった。チベットにサエム寺が建立された時期に、ジャワにはボロドブル寺院がまた、日本には東大寺が建立され、同じように仏教文化の殿堂となっていることは、不思議な事実である。

以上述べたことを略記してみると次のようになる。

チベットに中国系仏教
インド系仏教

流入→サエムの論争→

インド系仏教→チソン王791年インド系仏教を国教

化→僧侶の政治的進出→後世の政教一致のラマ政治の展開を指示。

チベット仏教は、以上の展開を持って、国教化されたが、やはり上流社会にのみ通用した、いわゆる貴族仏教で一般民衆への仏教の浸透は、困難であり稀薄であった。一方仏教教団の国家的護持優遇は、そのはねかえりとして、国民の経済的負担をますます増大せしめ、国民の反感をかった。こうして、仏教の破仏と期を同じくして、吐蕃の終末をむかえ初伝の仏教はほうかいした。

「後伝仏教の展開」

前期の仏教を王朝仏教とすれば、後期の仏教は民衆仏教・庶民仏教といえる。後期仏教の特徴は、(1)密教を中心とした庶民仏教、(2)宗派による活発な教団活動、(3)国外への伝播(モンゴル・ネパール・シッキム・ブータン)チベット仏教圏の確立があげられる。

衰頹した仏教は、智光・菩提光などの王の出家により、仏教復興の力強い原動力となった。しかし、容易でないことを悟った王は、当時インドのヴィクラマシーラ寺の学僧として有名だったアティーシャの入蔵に力を入れた。かくして、仏教復興運動は、1042年アティーシャがチベットに入ると同時に、中心となるべき指導者を得て、本格的な段階に入った。彼は戒律を厳格にし、チベット仏教の再興をはかった。その後、アティーシャの教学は、チベット仏教最大の人物といわれたツォンカパに継承され、集大成された。独身生活・禁酒等を始め厳しい禁欲による戒律を遵守し、黄帽をかむり黄帽派と称し、これに対し古派は紅帽派といわれた。黄帽派はラマ教を墮落から救い、二人の弟子(ゲルグパ、ゲラブジェ)により法灯が受け継がれ、代々相続されて発展することになる。

ダライ・ラマはゲルグパの系統をいい、観音の化身とされる。ダライはモンゴル語で「海」または「偉大な」の意で、大徳が大海の如く偉大であることを讃えてのことである。しかし、独身であるダライにとって世襲は不可能であるかゆえに、化身と呼ばれる転生説思想が生まれた。第3代を経て第5代に至るやチベット全土の政権が、黄教ラマの手に握られ、チベットおよびモンゴルに君臨する最大の教団となった。政教両圏を掌握し、歴代のラマはチベ

ット支配権を継承し、チベット君主となったのであるが、現在第14世のダライ・ラマは、1959年3月10日中共軍が、チベットに侵入したため、インドのヒマチャール・プラディッシュ州のダルムサーラに亡命政権を樹立している。

一方パンチェン・ラマはゲラブジェの転生ラマで、パンチェンの称号は第4代が、第5代のダライの師となったため頂いた称号であり、副法王の位にあり、阿弥陀仏の化身とされている。現第10代パンチェン・ラマは、ダライ・ラマがインドに亡命したため、チベット自治区準備委員会主任代理となっているが、ラマ教の伝統と中共の支配の板ばさみとなり苦悩していると伝えられているが定かではない。しかし、両者は時々紛争を起し宿命的な対立関係にある。

長い歴史を通じて、チベット人およびチベット周辺の国々の人びとの魂をいやしてきたラマ教の伝統とその栄光は、いまやその本土を離れて、北部のブリヤート、モンゴル南部のネパールやブータンなど、西部のラダーク、あるいはインド北部のダルムサーラ、さらに遠くはアメリカのニュージャージー州などでその光影を残しているにすぎない。しかし、ラマ教文化そのものが人類の歴史上に与えた影響はきわめて大きく、現在もなおその精神が多くの人びとの中に息づいているのである。

「ラマ教の美術・芸術」

10世紀わたって仏教の栄えたこの国には、仏教一とりわけ密教にもとずく数々の工芸品がある。ラマ教にとって偶像は重要な意義を有したので、仏像の鑄造・彫刻・タンカ（仏画）等の製作技術は、非常な発達を示した。

「タンカ」チベット独特のもので、綿布、カンバス、絹布などに画かれた仏画で、もともとインドのバタに由来するが、これを人々に見せて教義、講釈をしたり、祭礼の時の装飾用にする。主に仏陀の生涯を画いた仏伝図、諸仏、菩薩、ツォンカバを始めとする多くの高僧などを描く。これは前代の師匠に寸分ちがわず描くので、時代による変化はみられない。

「曼荼羅」 諸仏菩薩の悟りの世界を表現したもの

で、一定の方式に基づいて、諸仏・菩薩および神々を網羅して描いた図。曼荼羅の構成はほとんど一様の型をそなえている。すなわち画面の幅いっぱい到大円を描く。次に大円の中に方形の輪廓をつくり、これに四門を設ける。方形は対角線をもって四分し、四方を象徴する四色に染め分けられる。次に方形の中に本尊のいます内院にあたる円を描く。時に内院をかこんで二重、三重の円をつくることもある。これは、マンダラを構成する院の数を表示するもので、諸尊は院内の所定の位置に置かれる。この外輪の上下に如来、菩薩祖師および忿怒等を描く。これらの諸尊は、曼荼羅の主尊に関係深く、菩薩を主尊とするものには如来や菩薩を、忿怒尊には忿怒像が描かれる。

「礼拝画像」

ラマ教の礼拝画像は十尊程度の群像図が多い。中尊を中央に大きくあらし、上方に中尊の本仏や守護神、左右に主尊に関係ある尊や侍者、下方に主尊関係の忿怒護法像や供養者を描き、幅によって飛天や自然の景観（歌や詩の源泉となった自然や動物への愛情の表現）を添えているものなどが多い。これらは、図式にこだわらない、全く自由画風の曼荼羅と思ってさしつかえないだろう。

「仏像」 伝説によれば、チベットに最初に伝えられた仏像はインドのマガタ国からといわれているが、現存する最古の仏像は、7世紀文成公主が中国から持参したといわれる。密教教義の進展にともない、実に多種多様な仏像があるが、主にインドのパール朝の影響を強くうけた。時に後世のヤブ・ユム像は歓喜天の名で知られ、インドのヒンディーのシャクティー思想の混入により、快楽的意味を持つものでなく、仏像も単

身よりヤゴ（父・男性）・ユム（母・女性）の結合の形を現わした方が強力であるという考えから生まれたものである。

以上のとおり、ラマ教の芸術は、ラマ教の教義に由来する多面、多足、多臂また男女神の合体せざるものなど奇怪なものが多い。ラマ教において神を創

りだす時は、儀軌の法典にしたがわなければならない。ここから芸術作品を特徴づける現実主義が生まれ、よって時代による変化はみられず、きたなくなれば洗い流し、新たに彩色をほどこすといったように古い物を崇拜しなければならないといった考え方はみられない。またチベット芸術は、インド・ネパール・カシミール・コートン・シナ様式が混合した形でつくられている。

ヒマラヤ学入門 その43

旅券についての諸手続

「ヒマラヤ」54号にて、パスポートの取得方法について述べたが、今回は取得後に必要な手続を述べてみます。

長期間にわたる旅行では、パスポートに出入国印、査証印などが押され、その旅行歴が一目瞭然に分かるわけです。そのおのおのについて説明してみます。

(1) 旅券の査証欄に余白がなくなったとき

出入国印、査証印などを押したために旅券の査証欄に余白なくなることがあるが、この場合には、旅券1冊につき1回に限って、査証欄のつぎたし

（増補）ができることになっている。査証欄の増補申請は最寄りの在外公館（大使館、総領事館など、以下同じ）へ一般旅券査証欄増補申請証および旅券を提出しなければならない。

(2) 旅券の再発給をうける必要が生じたとき

旅券を紛失し、焼失し、もしくはいちじるしく損傷し、または査証欄に余白がなくなった場合には、旅券の再発給がうけられるので次の書類を最寄りの在外公館へ提出して申請しなければならない。

- イ. 一般旅券再発給申請書 1通
- ロ. 写真 2枚
- ハ. 旅券（査証欄に余白がないときおよび損傷したときのみ）
- ニ. 紛失届および警察の紛失届受理証明書（紛失したときのみ） 各1通
- ホ. 罹火災証明書（焼失したときのみ） 1通
- ヘ. その他（個々の事情に応じ、それぞれ指示される。）

(3) 旅券の記載事項に変更が生じたとき

旅券に記載されている事項に変更を生じたときは、遅滞なく最寄りの在外公館において旅券の記載事項

を訂正するための手続をとらなければならない。

その場合は、一般旅券訂正申請書（1通）のほか、記載事項に変更を生じた事実を立証する書類（例、氏名・本籍の変更ならば戸籍謄（抄）本）を添えて訂正申請を行う。

なお、記載事項に変更を生じたからといって、勝手にその項目をなおしたり、あるいは書き加えると旅券の改ざん行為となって刑法にふれることになるので、注意されたい。

(4) 渡航先の追加

旅券に記載された渡航先以外の国に渡航するには、その国を渡航先として旅券に追加する必要がある。従って、旅券に渡航先として記載されていない国に渡航する場合には、一航旅券渡航先追加申請書のほか、渡航費用の支払能力を立証する書類（例、出張命令書、航空券など）を添えて最寄りの在外公館に渡航先の追加を申請する。この手続を行わないで渡航すると、旅券法の罰則の対象となるので注意してほしい。

(5) 旅券の有効期間が経過するとき

旅券には一往復用と数次往復用の2種類がある。一往復用旅券はわが国を出国して帰国するまでの間有効だが、数次往復用旅券は旅券発行日から5年を経過した日（たとえ本人が外国に滞在中であっても）にその効力を失なう。

数次往復用旅券所持者で、海外赴任中にその旅券が失効することとなる場合には、最寄りの在外公館で新しい旅券の発給をうけなければならない。その手続は、旅券が失効する2～3ヶ月前からはじめるのが望ましい。

（鈴木康志）

〈関係の機関・国体——その2〉

日本ネパール協会 (Japan Nepal Society)

歩 み

日本ネパール協会の前身は、1964年にネパールに深い関心を寄せる民間人によって設立された「日本ネパール文化協会」である。当時我国には日ネ友好協会、日ネ文化友好協会、ネパール友の会などが設立されていたが、本会の発足によって一本化されたものである。

以後民間ベースで日ネの友好と文化協力に尽してきたが、72年6月に「日本ネパール協会」と改称し一層幅広い活動が進められている。

活 動

65年9月に「会報」第1号が創刊された。その中で日高信六郎会長は「日本国におけるネパールに関する綜括的な資料と情報の蒐集、整理、保存およびそれらの利用希望者に関する便宜供与」を当面の大きな仕事として掲げている。

67年にはその一端として「ネパール・ヒマラヤ探検記録」が発刊された。

これによって、技術協力、開発、登山、学術調査、その他でネパールに足跡を残した日本人の記録が一定の様式で集成された。

68年から「ネパール研究の集い」が始まっている。70年万博のネパール館建設には協会が大いに協力しマヘンドラ国王も来日され、盛大にネパール・デーが開催されたのは記憶に新しい。なお、この年ビレンドラ皇太子御成婚記念事業として、各界の協力によって1000余冊の図書がトリプバン大学図書館に寄贈された。

名称を改めた72年からは毎年「ネパール研究学会」を開催している。ここでの研究発表は登山を除く多面的分野にわたり、「シンポジウム・ネパール」としてまとめられ、発刊されている。(本年6月に第5回学会を開き、また、シンポジウム・ネパールNo.4を発刊)

この他、関係のネパール要人との交流、留学生の世話、災害救援活動、カトマンズでの文献調査・蒐集、日本国内のネパール関係文献調査など、幅広い

友好、文化活動が行われている。

なお、既述の出版物の他に下記の資料が発刊されている。

- ネパールの人と文化 70年9月 古今書院
- ネパール国内出版資料目録 73年12月 同協会
- ネパール語会話読本 75年 葉根出版

会報は現在(7月)17号まで発刊、隔月18-20Pで、ネパールに関する情報には貴重なものが多い。またH A Jとは友好団体の一つとしてお互いに協力関係を保っている。事実二つの団体の会員は相当に重複しているようである。

組 織

75年10月末現在、通常会員470名、維持会員16名、客員会員26名。

北海道、長野、中部、関西、九州の各支部があり支部独自の活動も行われている。

会員には何といてもネパールを訪れた経験者が多い。それぞれの会員にはコード番号があり、このコード番号を読みとることによってその会員とネパールとのかかわり具合がある程度わかるようになっている。

コード番号にかぎらず本会の情報管理システムにはH A Jとしても大いに見ならう点が多いようである。

会費は年間2000円(通常会員)、入会金3000円で、2名の会員のすいせんを得て入会できることになっている。

なお、会長の職にあって本会の発展の原動力となっていた日高信六郎氏は去る6月25日に逝去された。専務理事は川喜田二郎氏(H A J顧問)である。

なお、事務所は下記におかれている。

現在社団法人化をめざして準備が進められており、日ネ両国のかけはしとして一層充実した活動が企画されている。

(稲田定重・H A J、日ネ協会々員No.251)

H A J ・カンジロバ登山隊 公式報告書——出版予告

1973年にネパールのカンジロバ・ヒマールへ送り出した登山隊の公式報告書が出版されます。内容は下記の通りで、西北ネパールを含め、カンジロバ山群の資料としても価値あるものです。

一般への頒布に先立ってH A J会員の皆様へ、特別割引価格でお分けいたします。ただし、1人5冊までとし、10月末日までにご送金いただいた方に限ります。送金には振替「名古屋21645番 日本ヒマラヤ協会」をご利用下さい。

割引価格 1600円(送料H A J負担) (一般販売は送料別で 2000円です)

オフセット印刷 1000部 10月10日発行

——主な内容——

数10葉の写真による登山の様子
隊長の日記、トランシーバーによる交信記録
詳細なスケッチ的コース図によるキャラバン日誌
登頂記、ルート図、行動表など迫力ある記録
これまでの各隊の研究、コース図、文献つき
ネパールの風景、人をあしらったカット数10葉。

日本からヒマラヤから

インドに関する図書について

U. S Library of Congress Office

私たちの事務所ではインドで出版された本をリストアップし、著者の紹介も加えてフェイルしています。WashingtonにあるLibrary of Congressと協力して仕事をしています。インドで出版された本ならたいいそろっています。

住所は Shiela Theatre Building, New Delhi 110055, India, Tel 518151

Director は Jerry R. James

× ×

Dr. F. M. Hassnain 5月15日 スリナガル

H A Jの皆さんはいかがお過ごしでしょうか。カシミールもだんだん日本人が訪れて下さるようになり喜んでいきます。

私はH A Jの沖さんと2冊目の本“Paradise Kashmir”を出版準備中です。カシミールの山のことも加えて本にしたいと思っています。1977年の春頃に出版される予定です。

× ×

葉上光昭 岡山県赤磐郡 6月17日

1977年1月のネパール行を計画しています。1月4日から17日までの予定でエベレスト山麓を歩きます。1975年以来3度目になります。チベット国境のコダリまでは2度行きました。チベットへ行ってみたいという夢は持ち続けています。

(葉上さんは60才を過ぎた方ですが、そのお元気さにはいつも感嘆しています。H A J)

岡本俊彦様 高知市 6月14日

5月21日ネパールのラムジュン峰遠征を終え帰国しました。同じH A J会員の川田寛君も第3次 Attackで登頂しました。好天にめぐまれたせいもあって、隊員13名、シェルパ3名の登頂となりました。

C1まではH A Jルートと反対側のアイスホール左の高知ルートと名づけたルートによりました。それより上部ではH A Jと同じようなルートをとりました。初登のイギリス隊と同じく、雪に苦しめられました。

今回の遠征にはH A Jに大変お世話になり感謝しております。H A Jのラムジュン隊の報告書はできたでしょうか。(本年中に発行すべく準備中です。ご期待下さい。H A J)

H A J 名古屋集会報告

1976・6・11

6時30分より9時までエアー・インディヤ名古屋事務所にて、東京事務局の鈴木氏と岐阜の山田氏の解説により、“スン・クン及びカシミール”また“ラダック”のスライドを楽しみ、カシミールの話に花が咲いた。

また、事務局より7月3日・4日に実施する第2回親睦登山—御岳—についての説明があった。

<参加者>

沢田睦子	橋本敏子	森保仁
森秋正	岩水竜峰	水谷洋子
豊田妙子	須賀玄郷	小椋優子
水野治朗	伊藤正夫	鈴木康志
山田正弘	餅井照和	沖允人

“ヒマラヤ山荘” オープン

かねてから準備をすすめておりました、HAJの山小屋が完成しました。会員、神門巖（ごうどう）さんの絶大な協力の賜物です。研究会に、集会にどうぞご利用下さい。標高1000mほどで、杉林と川に囲まれた静かな谷間の家です。近くにはハイキング・コースが沢山あります。

＜名称＞日本ヒマラヤ協会・ヒマラヤ研究所（略称ヒマラヤ山荘）

＜場所＞岐阜県郡上郡和良村大字宮代（通称・熊山）

＜交通＞岐阜から越美南線「郡上八幡」下車、車で40分、高山線「飛騨金山」下車、車で30分、名古屋から車で2時間位。利用申込の方にはルート図をお送りします。

＜利用申込＞先づはがきで利用期間と人員をご連絡下さい。利用可能なら折り返し連絡しますので、1回（連続の場合、何日でも何人でも可）

1000円をそえて、HAJ名古屋事務所へ。

このお金は研究所管理者や申込者への連絡費とし

て使用しますので、申込を取消された場合でもお返ししませんのでご了解下さい。受付は申込順とし、受付けた方へは山荘の鍵と利用申込書をお送りしますので利用後ご記入の上利用料金とともにHAJ名古屋事務所へお送り下さい。

＜利用料金＞申込金の他に寝具使用料、光熱費などとして会員は1泊500円、会員外は1000円を素泊代としてお支払下さい。ただし未就学児童は無料。

＜研究所の設備＞6畳×2、8畳×1の3部屋に台所、風呂、トイレがついています。電気とプロパンガスがあり、10人分の食器、寝具が用意してあります。10人以上宿泊される場合はシュラフなどをご持参下さい。なお近くの「山崎屋」旅館で1食500円から食事を出前してもらえます。

＜開所式＞9月18日（土）～19日（日）1泊2日を予定しています。

食事つき2000円、申込 HAJ名古屋。

HAJ・アフガニスタン登山隊——現地だより

（その1） カブール着、出発準備

全隊員元気で7月1日17時アフガニスタンの主都カブールに着き、アリアナホテルに到着きました。翌、7月2日は、有田隊長、松田登攀隊長、渉外担当の佐藤隊員はそれぞれ役所めぐりなどをし、他の隊員はカブールの北にある3000mほどの峠、サラング峠へ車で出掛けました。ワハンへむかう道です。

—— 羽田 出発 ——

6月28日、13時30分にPIA（パキスタン航空）で羽田を出発し、北京で約1時間小休止。ここではビールが安く（日本円に換算して60円位）、要領のいい隊員は早速飲んでいました。

ラワルピンディへは現地時間22時30分着。税関では全くフリーパス同様に、一個の隊荷のオープンもなく通過し、タクシー3台で10kmほど走った市中のマハラジャ・ホテルに泊りました。

—— HAJデポ品の受とり ——

6月29日、バスをチャーターし、ペシャワールにむかいジャンズ・ホテルに13時10分着。すぐに5隊員（松田、松館、寺村、村上、佐藤）はタクシーでサイドシャリフへ。18時30分、パーク・ホテル着。HAJのパキスタン・デポ品はそのままあり、ホテルのマスターが明日出してやるということで、下手な英語同志で自信がなく心配しながら明日のこととして就寝。

6月30日、マスターのアシスタントだというMr. Nian Shadに会う。HAJの沖さんや、有田隊長をなつかしんでいました。デポ品はすぐに倉庫からトランクと袋を出してくれました。リスト通り完全でした。

前のマネージャーのクワジャ氏は2年前に死んだ

そうです。

またいつ来るのかとニアン・シャッド氏は名残り
惜しそうにしていました。夕方、ペシャワール帰着。

—— カイバー峠を越える ——

7月1日、ホテルの前の交叉点が、ターミナルに
なっているロード・トランポート・コーポレーショ
ンのバスの席がとれ、ペシャワールを7時30分出発
し、カイバー峠を越えました。

アフガニスタン入国も、パキスタンと同じように
有田隊長のサギ師ともいえる外交手腕で順調にパス。
キスリング1個とHAJデポ品だったトランクをオー
ープンされたのみでした。キスリングからは聴診器
が出てOK、トランクもOKでした。形ばかりの手
続といったあっけないパキスタン出国、アフガニス

タン入国でした。

カイバー峠からアフガニスタンらしい眺めを車窓
から楽しみながらカブール着、16時。

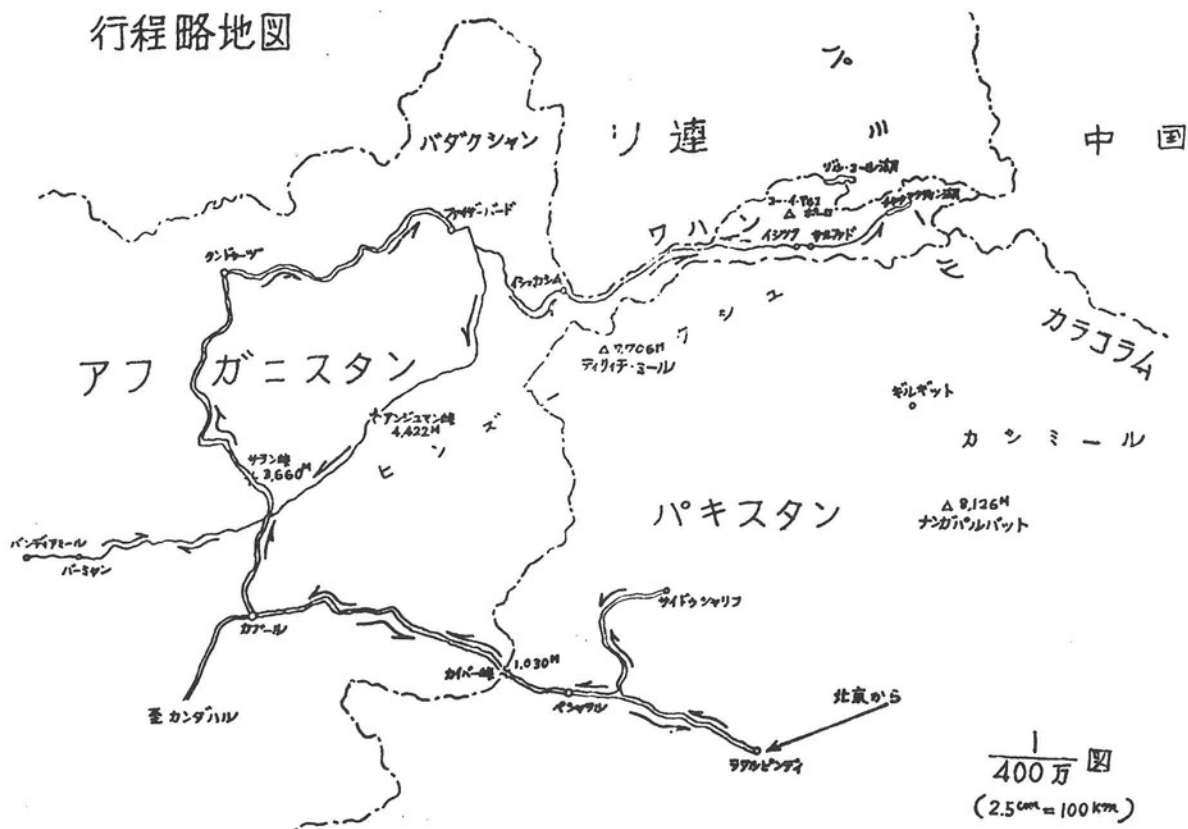
アリアナホテルでかねて連絡しておいたアミール氏
の弟、Mr. Yar M. Mohabad に電話し、18時30
分ホテルで会いました。

7月2日はあいさつや通信などで朝のうちに過し、
あとは休日としました。

これから数日間オフィスまわりをはじめます。兼
松豪商のHAJアフガンデポ品は明日にでもとりに
行くつもりです。手続が完了してから食糧の買付な
どします。

(7月3日 カブールにて 佐藤優隊員)

行程略地図



(その2)

ワハン入域不許可— 転進

当方全員元気でっております。例のカブリ（ひどい下痢）は3名以外皆やりました。

パミールですが努力をしたのですがやはり今年は Closed とのことのでめでした。そこで他の山に計画を変えました。登山隊名は、Hindu Kush Expedition of H A J 1976 でヌーリスターの Mt. Marchech (6450m) と、Mt. Koh-i-Chrebek (6290m) でキャラバンのコースはカブール— クンドウズ— ファイザバー

帰国挨拶

青森県山岳連盟八戸ヒマラヤ遠征隊

私達、青森県山岳連盟八戸ヒマラヤ遠征隊はインド、ガルワール・ヒマラヤの秀峰ドウナギリ(7066m)の登頂を目指し5月12日ベース・キャンプを4750mに設営して以来、登攀活動が続け、6月4日キャンプを6600mに設営し、6月6日、榊・三浦・中村の3隊員がアタック隊員として、登頂を試みましたが、折からの天候悪化のため、ついに頂上ドーム下の約6800m地点で力尽き、登頂を断念いたしました。

この遠征計画に当り、皆様方より多大なご協力、ご援助をいただきましたが、私達の力不足のため、そのご厚情に報いることができず、深くお詫び申し上げます。

しかしながら、私達はこの遠征を通し、多くのことを学び取ることができました。その成果をこれからの社会生活を通し、有意義に生かす所存でおります。そして社会人としてさらに自確を深め、社会奉仕に努力する決意でおります。

これからは、さらに若い世代が私達の意志を受け継ぎ何時の日か必ずやヒマラヤの頂に立つことを願いつつ、皆様方のこれまでのご厚情に感謝申し上げ、ご報告にかえさせていただきます。

登山隊長 加賀勝・副隊長 榊勝美

隊員 山田泰義・音喜多博・森山昭一郎
小向肇・小笠原好太郎・三浦勝美
中村勉・桂修二(医師)

路査隊員 川村康憲・直江裕進

なお、路査隊員は現在カシミール州ラダック地区にて活動中であります。

ド—ゼバック—サングリッチ—ナウ—ウエラン峠(4800m)—アサダバード—ファイザバード—カブールで北から南へむけるコースです。これは日本大使館へ書類をもって行き(6日)次の日の夕方にはOKが出ました。

パミールの事については帰国後また、くわしく話をします。

Marchech, Chrebek とも既登峰のようですが資料らしい資料がなくもなく、サングリッチ峠を下りた最初の谷をつめたところでは、ないかという程度です。接近に時間をくいそうですし、その周辺ということになりそうです。

(7月9日 カブールにて 隊長・有田 豊)

ミニ・ニュース

H A J 会員による出版物

歴史と砂漠の国と山

1974年富山県山岳連盟シルクロード踏査隊報告、1976年5月30日 頒価1500円 B5版150ページ 約4カ月にわたり、ソ連、イラン、トルコ、アフガニスタン、インドなど7カ国を約2万kmを主としてバスで走ったときの見聞記。Ⅰ部行動記録、Ⅱ部登山記録(ダマバンド、エルジュス、シュブハン、アラム・クー、ハヌマンティバ)、Ⅲ部踏査雑記、Ⅳ部資料 からなっている。よく整理された内容とすっきりしたレイアウト、地図や写真も豊富、各巻の各地の物価表など資料も多く有用である。入手希望者は、H A J 名古屋事務所か、隊員の藤条好夫さん(H A J 会員)へ送料200円加えて送金下さい。

ヒマラヤを目指した越中人たち 1,600円

橋本本店 窓出版会 51年4月10日

「石崎光瑠のヒマラヤ登山」(大正5年)にはじまり、1975年の山雄会カラコルムK6峰などまで越中からヒマラヤへむかった人たちの足跡をあますところなく伝える好著。

著者は創立当初からH A Jの会員で、「ヒマラヤ」の表紙画を描いていただいたこともある。著者のサインとスケッチの入った本書10冊ほどがH A J 名古屋、東京事務所にあります。送料共1600円を同封してお申し込み下さい。

窓出版会の住所は「富山市田中町15」です。

新刊・目録

Himalaya— Abenteuer by Herrling koffer, K M

ナンガパルダットにいどんだヘルリッヒコッフ
ーの最近の本。1975年 Passavia社版
4,560円

Changabang by Bonington, C.

ガルワールの難峰、チャンガバンを1974年に登
頂したときの記録。写真も大きくして迫力がある。
彼はこの遠征のあと、エベレスト南壁にも成功した。
128ページ。1975年 5,060円。前記とも丸
善で扱っている。

シルクロード 加藤九祚・斎木幸子

巖々堂ユニコンカラー双書

51年2月5日 500円

シルクロード、アフガニスタン、ソビエト、イラ
ン、イラク、トルコなど沢山のカラー写真でまとめ
た文庫型の本。“人と出逢う旅”のサブタイトル通
り、著者たちがこのシルクロードの旅で出逢った人
たちの思い出をうまく盛り込んで楽しい読物に仕上
げている。

チベットの新しい姿 北京・外文出版社

1974年 500円(写真集)

チベット高原、新しいチベットの人たちの生活、
ラサの姿など116ページの大版の写真が新しいチベ
ットの姿を示している。ラサのポタラ宮殿をバック
に小学生の子供が体育をしている写真など印象的
である。なお、中国で出版された本は下記の書店で入
手できる。

東 方 書 店 東京都神田すずらん通り

東方書店大阪店 大阪市北区伊勢町6

〃 京都店 京都市河原町通り丸太町上ル

ユーラシア叢書 原書房 昭50年

1.回教史 アミール・アリー著、塚本五郎訳

5,400円、イスラム文化千年の歴史。

2.古代の南ロシア ロストフツエ著 坪井良平訳

4,800円、「スキタイ学」の古典的名著

などが既刊である。以下

トウルキスタン史(バルドリド)

アジア遊牧民族史(ルネ・グルセ)

東西交渉史(H・ユール)

東西交渉史論(史学会編)

トウルキスター(ロス)

アレキサンダー遠征史(クルティウス・ルクス)
などが続刊される。

南満州鉄道(株)三十年略史

原書房 昭50年 9,000円

この他に10年史 15,000円、第二次10年史上下
(各9,500円)なども明治百年史叢書として出版さ
れている。「満州事変と満鉄」上下(各7,000円)
もある。

なお、戦前に東亜で活動した人を解説した人名辞
典ともいふべき「東亜先覚志士記伝」上・中・下
(黒竜会編)もこの出版社から復刊されている。

大興安嶺探検

今西錦司 編著 講談社

3,800円 昭50年(復刊版)

1942年、今西グループが成し遂げた世界最後の
エクスペディションの本格的総合報告書。

解説=梅棹忠夫

ビルマ・ヒマラヤ研究 No.2

ビルマ・ヒマラヤ研究会 75年2月25日発行

頒価 1,000円

知られざるネパール、イラワジ源流からアッサム
へ、インドで見たこと聞いたこと、ビルマ・ヒマラ
ヤ時流ニュース、他から成る。ビルマ・ヒマラヤと
は“ビルマとヒマラヤ”のことのようである。ビル
マにウェットをおいているがカラコルムなども出て
いる。

K 12 登山報告

市川山岳会K12登山隊 75年3月20日発行

71年以來の執念が結実したK12(7468)の登頂
記録で速報的報告である。京大隊が登頂したものの
遭難死している。頂上付近の記述は詳しい。

シルクロードの宗教<幻の寺院をたずねて>

佼成出版社 50年12月10日 2,000円

アジア仏教史(全20巻)中国編の中の第5巻V)で
ある。仏教の専門書ではあるが、ヒマラヤやシルク
ロード好きには読みごたえがあり、興味深い。

アッサム・シッキム調査隊について

隊員募集 = 締切 10 月末

かねてから H A J 東部ヒマラヤ研究会で進めて来たアッサム・シッキム調査隊は次のような日程で行なうことにしております。非常に興味深い地域で、今後の研究が待たれております。詳細については H A J 東京事務所または下記へ問合わせて下さい。経費は約40万円、28日間です。

〒153 東京都目黒区東山

藤 井 毅 (東部ヒマラヤ研事務局)

日 付	曜日	都 市 名	時刻・交通機関	概 要
12月26日	日	東 京		(シッキムの許可解認)
12月27日	月	デ リ ー	滞 在	羽田より空路、デリーへ
12月28日	火	デ リ ー		デリーより空路、カルカッタへ
12月29日	水	カルカッタ	滞 在	アッサム入域許可取得
12月30日	木	カルカッタ	滞 在	(予備日)
12月31日	金	カルカッタ バグドグラ ダーズリン		カルカッタより空路、バグドグラへ 空港にてダーズリン入域許可取得 車又はヒマラヤ鉄道にてダーズリンへ。
シッキム入域不可能な場合			シッキム入域可能な場合	
1月1日	土	ダーズリン	滞在 (ヒマラヤ登山学校、展望台、植物園など見学)	1月1日 土 ダーズリン (登山学校、展望台など見学)
1月2日	日	〃		1月2日 日 ダーズリン
1月4日	火	〃		1月3日 月 ダーズリン
1月5日	水	〃	車にてブータンとの国境の町マナスへ	ガントック
1月6日	木	マ ナ ス	野性動物園	1月4日 火 ガントック チベット学研究所
1月7日	金	マ ナ ス	(エレファント・ツアー)	1月5日 水 ガントック 王宮など見学
1月8日	土	マ ナ ス	汽車にて	1月6日 木 ガントック
1月9日	日	ゴウハティ	滞 在	1月7日 金 ダーズリン 車にてダーズリンへ
1月10日	月	ゴウハティ	車 に て	1月8日 土 バグドグラ 車にてバグドグラへ
		シ ロ ン		1月9日 日 シ ロ ン 車にてシロンへ
				1月10日 月 シ ロ ン 滞 在
1月11~13日		シ ロ ン	滞 在	
1月14日	金	シ ロ ン		
1月15日	土	カジランガ	滞 在	車にてカジランガ動物保護区へ
1月16日	日	カジランガ		インド 1 角サイ、野牛、大鹿などを象ののって見物する。
1月17~19		ジョルハット	(予備日)	
1月20日	木	ジョルハット		空路にてカルカッタへ。
1月21日	金	カルカッタ	滞 在	
1月22日	土	カルカッタ		カルカッタより空路、羽田へ。
		東 京		通関後解散

ヒマラヤをあなたの目と足で確かめて下さい

ネパール・トレッキング

神々の座ヒマラヤ山麓を訪ねます。圧倒的な迫力と美しさは、終生忘れ得ぬ旅となるでしょう。首都カトマンズのバザールと寺、おとぎの国というのにふさわしいたたずまいです。

自由行動中は各自の責任でトレッキングしていただきますが、コースや日程など事前に決めてご相談下さい。簡単な計画書を作成して下さい。費用は日本出発後2日目の朝食までと帰国3日前夕食より日本帰着迄の費用です。参加人数により多少の変動があります。

エスコートつきコース

14日間コースには自由行動日を利

用してガイド、シェルパつきの一切をお世話するコースも用意してあります。コースとしては、カトマンズからポカラへ車で行き、そこから徒歩でマチャプチャレの美しいノウダラの丘へ登り、さらに進んでゴラバニの峠まで復往します。ただし、参加者の体力やご希望で、ノウダラとその周辺を楽しむことになるかも知

れません。

食事やポーターなど一切をお世話しますので寝袋のみご持参下さい。服装は日本の初秋のハイキング程度で結構です。荷物はポーターが運びますので、参加者の方はサブザック一つで歩いていただきます。宿泊は民泊またはテント泊になります。

アンナプルナやダウラギリの8,000mのヒマラヤの雄姿を充分お楽しみ下さい。

日程(14・28日間) 出発日 51年12月26日

出発日 51年12月26日 期間28日間または14日間
募集人員 各20名

締切日 出発2か月前

費用 289,000円、ガイドつき14日間は372,000円

(ただしこれは10名以上まとまった場合の料金です。人数が少ない場合は若干高くなります。)HAJ・ファミリーツアー特別コース28日間は493,000円。

<記念スペシャル・トレッキング>

山里寿男画伯とともに アンナプルナ内院へ

HAJ創立10周年を記念して、スペシャル・トレッキングを企画しました。山里寿男画伯とともにアンナプル南面の雪と氷の美しく、そして厳しいヒマラヤを楽しむ仲間とトレッキングします。食事やシェルパ・ポーターなどをお世話します。

出発日 51年12月26日

第1日 東京、羽田空港より空路ニューデリーへ。

第2日 デリーより空路カトマンズへ。

第3日 カトマンズにてトレッキング許可取得。

第4日 カトマンズより車にてポカラへ。

第5日 トレッキングへ出発。ポカラよりベディ。

第6日 ベディよりビレタンティへ。

第7日 ビレタンティよりガンドルクへ。

第8日 ガンドルクよりチョムロンへ。

第9日 チョムロンよりドバンへ。

第10日 ドバンよりアンナプルナBC(約3,700m)。

第11~17日 スケッチとトレッキング。

第18日 ドバンよりチョムロンへ。

第19日 チョムロンよりガンドルクへ。

第20日 ガンドルクよりビレタンティへ。

第21日 ビレタンティよりノウダラへ。

第22日 ノウダラよりポカラへ。

第23日 ポカラ・ペワ湖にて休養

第24日 ポカラより車にてカトマンズへ。

第25日 カトマンズに滞在、荷物の整理、バザールで

第26日 カトマンズのお買物を楽しんで下さい。

(オプション・ツアー、カカニの丘、山岳フライトなど)。

第27日 カトマンズより空路東京へ。通関後解散。

募集人員 20名 締切 10月末 費用 493,000円

お問合せ・お申込みは

主催

株式会社 ラベル日本

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-11 ラクチョウビル5階

担当者・外ノ池愉平 電話(03)574-0241

一般登録67号 取扱い主任者・五艘和雄

企画

日本ヒマラヤ協会・フロンティア企画

〒164 東京都中野区中央3丁目45番18号 沢本ビル1階

担当者・鈴木康志 電話(03)365-2162

ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.

EXPRESS HOUSE

NAXAL BHAGABATI BAHAL

P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL

電略 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE
をご利用ください。

家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もでき
ます。 宿泊代＝1泊朝食付30RSから

※長期滞在者はご相談に応じます。

日本語でお問い合わせください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最
後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

(株) ト ラ ベ ル 日 本

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1
ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461
担 当——外池・永瀬・月候・小島

海外登山，トレッキングに傷害保険を

——海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております——

タケ

岳

産 業 にご相談して下さい。ノ

あなたの所得を補償する保険をご存じですか？(所得補償保険)

●所得補償1～5年，傷害特約60～120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益
・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災
保険(株)代理店

タケ
岳

産 業

大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号 〒532
TEL 06 [304] 1115番
●ルスノトキ＝大正海上十三営業所 304-5774

発行 日本ヒマラヤ協会
 発行者 柴田 金之助
 編集 「ヒマラヤ」編集委員会
 昭和五十一年九月一日発行 通巻第五十号 定価 五〇〇円・送料 五〇円（年間購読料四〇〇〇円）
 名古屋事務所 四六八 名古屋市中区一ツ山一四十四一七 電話 五二一八〇一・四四一四
 東京事務所 一六四 東京都中野区中央三丁目四十五一十八 沢本ビル1F 電話 三三六五二・二一六二

大自然の神秘と雄々しさ、 ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はプータン・シツキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

ノー・公害

時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花崗の美しさ。海拔4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウツ湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。ダーズリン

シツキム
 ごく最近まで鎖国状態であったシツキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源郷」とはこのこと。王宮を中心に神秘の国が、静かなたたずまいを見せています。ダーズリンからの途中にあるカリンポンの町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。
 (註) シツキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要ですが詳しくはエア・インディアにお問い合わせください。
 ガルワール・トレッキング
 ガルワール地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンダデビル(7816m)や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫「花の谷」や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。



世界の35都市をネットする

エア・インディア

東京 ● 千代田区有楽町日比谷パークビル100 ☎214-7631
 大阪 ● 東区備後町松豊ビル541 ☎264-1781
 名古屋 ● 中村区堀内町ホテルニューナゴヤ450 ☎583-0747
 広島 ● 鉄砲町1-20第3ウエノヤビル730 ☎28-7211